



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	H. ヘラー「市民とブルジョア (Burger und Bourgeois) 』
Author(s)	大野, 達司//訳; OHNO, Tathuji//ubersetzt von; 今井, 弘道//訳 他
Citation	北大法学論集, 39(3), 223-245
Issue Date	1988-10-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16638
Type	departmental bulletin paper
File Information	39(3)_p223-245.pdf



H・ヘラー「市民とブルジョア(Bürger und Bourgeois)」

大野達司
今井弘道 訳

「市民層」は死んだ。世論の一致した見解がみられることは今や稀であるが、これは世論がドイツに限らず一致を見ている稀なものの中の一つであろう。ボルシェヴィストもファシストも、王国は近づいた、ブルジョアの生活形態の運命は死すべきものと定まった、というような黙示録的なヴィジョンを告知している。彼らは高らかに市民の告別の鐘を打ち鳴らしているのである。

しかも、時代のあらゆる兆候はこのような預言を確認しては

いないであろうか。第一次大戦、インフレ、世界恐慌を通じて経済的にプロレタリア化したのは、本来の中間身だけではなかった。新旧にわたる無数の大市民もまたプロレタリア化した。そればかりか、精神的内実と政治形態との乖離にもなつて、ドイツの市民層の大部分は、アナキー化しさえした。かような事態が起らなければ、ドイツの所有市民は政治的諸規範や諸形態の自立した世界を失わずにすんだことであろう。西欧の民主制国家とは異なり、ドイツの市民層は、政治的支配を实

際には経験したことがなかった。市民的法治国家や国民的統一
は彼ら自身の行為によって勝ち取られたものではなく、上から
の革命によって与えられたものであった。そして、悲劇的な歴
史的経過を迎える中で、市民は一九世紀には、封建的反動と社会
革命の間で身動きが取れなくなってしまう。市民は社会
革命に対する恐怖から、結局は封建的反動に身を任せてしまっ
た。市民層がひたすら経済的活動に従事し、完全に脱政治化さ
れていくという方向を選んだわけではないということを示そう
とした場合にせいぜいなしえたのはこの程度のことであった。

今日、ドイツにおいては、本来の市民政党がすべて根絶され
てしまっている。それだけではない。従来、法治国家は市民層
に固有の国家的な生活形式であるとみなされてきた。しかし、
この法治国家そのものも、所有市民層の圧倒的多数によって否
定されるに至っており、今やそれを擁護するものは、権力政治
的には、社会民主党と中央党に組織された手工業者層にすぎな
いというパラドキシカルな状況に至っている。所有市民層にお
いて麻痺してしまったものは政治的自己決定だけではない。精
神的・道徳的自己決定への意志もまた麻痺してしまったかと思
われる。ロシアのボルシェヴィズムが法治国家とともに爾余の
すべての自治をも犠牲にってしまったという事実は、ロシアの

文化水準と国民的歴史とが、ヨーロッパのルネサンスを経験し
たこともなければ、本来の市民層が存在したわけでもなかった
という事実から理解可能である。しかし、教養と所有とに基づ
くドイツの民主制そのものが見棄てられるに至り、原理的に自
律に敵対する理想への熱狂が席捲しているということ、所有
市民層に属する青年達が、精神的な自己責任を国家的・社会的
に保障しているあらゆる制度に対して、それは克服されたブル
ジョアの予断にすぎないと、嘲笑を浴びせ、あらゆる理性を悪
魔の情婦にすぎないと見る指導者達に歓呼の声を挙げていると
いうこと、このようなすべての兆候は、所有市民が実際に文化
を領導するという自らの役割を果し終えたという時代状況を明
瞭に示している。

そのようなことが本当にいえるのかどうかという問題を、こ
こで究明しようとするわけではない。ここでは、「市民層」が
死んだという場合には、一体何が死滅したことになるのか、と
いうはるかに控え目な問に答えるにとどめたい。そしてそのた
めに、一般に行なわれている議論においては普通見逃されがち
となっている若干の概念上の区別をここで企ててみたいと思
う。まさしく他ならぬ市民の文献においてすら、市民、所有市民、
およびブルジョアという概念が軽率に混同されていて、由々し

H. ヘラー「市民とブルジョア」

き事態を惹起しているが、このことは何も今日初めて生じたことだというわけではない。ロマン主義的—キリスト教的な雰囲気もつ不明瞭さは、もとより欠くべからざる明瞭さを求めんとする意志を生み出すきっかけとなったものであった。しかし現代においては、全く恣意的に、何のためらいもなく、自分があらゆる市民的な生活形態を冥府のうちに投げ込んでしまふ英雄であるかのようなジェスチャーを効果たつぷりに描き出すために、このような概念の混同を通して、このロマン主義的—キリスト教的な雰囲気を活用されるという有様である。しかしながら、大抵の場合には、市民層の神々の黄昏といったメロドラマ的なフレーズの背後に見出されるものは、自らが用いるフレーズがいかなる帰結をもたらすのかを見通すことができず、ましてやこの帰結を自ら体験することもできないブチブルにすぎない。ブルジョアがまとうこのようなアンチ・ブルジョア的な擬態に隠された正体を暴露することが、市民の概念をブルジョアの概念から区別するというこの試みに役立つであろうことはいうまでもあるまい。

この二つの概念には、部分的に重なるところがあるのは事実である。もしそれがなかったなら、それらが日常的に混同されることもありえなかつたであろう。市民は、何よりもまず、国

家と社会に対して形式的に関係するものであり、ブルジョアは国家と社会に対して内容的に関係するものである、ということができる。我々が市民と呼ぶのは、社会的・政治的権威を尊重し、自らの国(Land)の人倫と法とに常に従う人々のことである。かかる合法性を尊重する動機については、市民という概念は何も語りはしない。市民的な秩序への同調の根拠をなすものは、偏狭な自己利害でもありうるし、献身的な偉大さでもありうる、また、宗教的な確信でもありうるし、没思考的な習慣でもありうる、ブリミティヴな自己欺瞞でもありうるし、かかる市民としての徳こそがあらゆる高次の人間文化の前提だということについての明確な確信でもありうる。それゆえ、市民概念には、法律の誤った適用に対してすら大いに敬意を払い不当な死刑から逃れることを拒絶したソクラテスから、アメリカのパビットのようなタイプに至るまで、様々なものが含まれている。

この限りにおいて市民という概念は没価値的なものであり、既にフランス革命以来否定的な評価を受けているブルジョアという概念と交錯する部分がある。ブルジョアとは、自らの社会的・政治的安全に全く満足しきっている市民のことである。ブルジョアとは、時代の問題にも永遠の問題にも関わらないがゆ

えにいかなる疑念にもわずらわされず、自らの個人的および社会的な存在のあり方に全くのやすらぎを感じているものである。

自分が社会にどのような影響を及ぼすかという点を越えてまでブルジョアに指針を示すものは何もない。ブルジョアはただ自ら自身を意欲する人間にすぎない。社会的・政治的なるもの、精神的なるもの、官能的なるもの、宗教的なるもの、そして知的な新地平、このようなものを創造したりその深淵を見きわめたりすることに通じる扉は、ブルジョアに対しては閉ざされている。ブルジョアの感情的・知的地平の狭隘さ、想像力の欠如、冒険に対する小心さ、自らが抱く情熱の無力さ、こうしたことのためにブルジョアは自分自身の卑小な生きざまを社会の中で確保することの他にはいかなる理想も抱こうとはしない。ブルジョアの特徴は、社会と国家の規範を尊重することにあるのではなく、それらを絶対化して、そこに自らの究極的な魂と精神との基礎をもとうとすることにある。市民的ビュルガな人倫や民法典(Bürgerliches Gesetzbuch)は、ブルジョアと何らかの背後関係があるわけではない。だからといって彼らは、それを疑問視の対象とすることもない。それらから彼等が読み取るものは、どの程度まで自分たちはそれを利用することができるかという点に尽きる。彼等の抱く楽観主義は悲劇とはおよそ縁のないも

のであって、自分たちの想像しうる限りの紛争はすべてこれらの人倫や法典のうちで最終的に調和にもたらされうるとみなしている。一九世紀におけるブルジョアの信仰簡条は、経済・科学・技術であった。

現代の政治的な概念的混同から脱却するためには、ひたすら市民的ビュルガなものとしての安全をブルジョア的なものとしての安全から明確に区別することが不可欠である。両者を混同させておいてそれを好き勝手にあやつることは、現代の政治的ロマン主義者が大いに得意とする手品の一つである。社会的諸関係に、つまり経済的および政治的諸関係に可能な限り計算可能な安全性を求めようとする市民ビュルガの努力は極めて正当であり、それはまさしく将来のあらゆるヨーロッパ文化にとつての不可欠の条件と呼んで然るべきものである。原始的な農耕的生活形態においては、安全と危険とは、本質的には、人間の計算や支配から大幅に独立性を有している自然の諸力に左右されるものであった。だが他面では、不動産の形態における資本は、動産の形態における資本よりも常に遙かに安全な生活の基礎である。より高次なあらゆる社会形態・経済形態の基礎をなすものは、自然を科学的に計算し技術的に支配することと社会的諸関係を組織的に完全なものにしていくことである。それゆえ、今日の反革命的

ロマン主義者達は科学と技術とを直ちにブルジョア的イデオロギーとして片づけてしまっているが、これは誤りであるばかりか危険でさえある。科学と技術とは、我々を魅魅魍魎に対する恐怖から解放し、そのことによって我々が誇りに満ちた態度を取ることを可能にしてくれた。それは、大多数の人々にとって、みじめで禽獣同然の状態からの解放であったし、現在でも依然としてそういえる。それらを放棄せよなどというのは、再び野蛮状態に戻れというようなものである。しかしともあれ、経済、科学そして技術の三つのいずれによっても究極的な理性性と安全性とが提供されるとは限らない。それにもかかわらず、それらのうちに究極的な理性性と安全性とを求めようとする点にブルジョアの特質があることは確かである。だが、現代の市民の安全性にとつても、また将来のヨーロッパの国家——それがいかなるものになろうとも——にとつても、合理的な法、合理的な経済と技術は、文化の不可欠な手段なのである。

市民として、やはり経済、国家、教会に自らの現世での幸福や死後の幸福を期待するが、だからといってそのことが市民を直ちにブルジョアにするわけでは決してない。安全性が生活の前提にとどまらず自己目的とされる時にはじめて、その安全性はブルジョア的と形容されて然るべきものとなる。かくして、例

えばブルジョアが、一定の時期に教会にいわば保険料として寄進するおかげで無制限への恐怖や神に対する不安を免れることができるのだという信仰を抱懐するや、教会はブルジョアを永遠なるものから遮断する以上、まさに神に反する制度となるわけである。教会に属するブルジョアにとっては、永遠の問題は、恐怖と戦慄を惹起する類の問題ではなく、宗教上の行政官吏に解決を委ねるべき技術的組織問題にすぎない。ファシズムは教会を市民階級の支配を保障する団体として利用したが、このような態度もまた、ブルジョアのマキャベリズムにちがいない。

その際、彼等はドストエフスキーの大審問官の役割を、即ち、人民を愛し人民の弱さを知っているがゆえに、キリストに背を向けている人民たちのために教会を維持しようとするあの大審問官の役割を、引き受けたがっていると見てよい。このような保身の仮面を看破するということは極めて重要である。たしかに大審問官は救世主であるイエスを次のように非難した。「お前は人間の良心を永久に休らかにしてやるための確固たる基盤を与える代わりに、異常なもの、謎の如きもの、不確かなものばかりを求め、人間の力に余るものばかりを与えた。そのためにお前の行為は、およそ人間を愛していない者のものであるかの如くになってしまったのだ。お前は、他ならずその人間たちの

ために自分の生命を捧げるためにやってきたにもかかわらず、だ。人間の自由を奪い去って自らの支配下に置くべきところで、お前はむしろその自由を拡大してやり、人間の靈魂に自由の苦痛という背負い切れない重荷を永久に背負わせてしまったのだ^①。だが、大審問官は自分自身のブルジョアの安全性を確実なものとするために他者の自由を奪い取ったわけではないし、ドストエフスキーがキリストと大審問官の争いを永遠に決着のつかぬ対立として扱っているわけでもない。この点は注意を要する。これとは反対に、今日のブルジョアは、このような心の安静を奪い去ってしまう問題を一義的に解決してしまった。宗教と教会とは、ブルジョアにとっては、支配階級の技術的な権力手段でしかない。まさしくこのような理由から、宗教や教会は、神に反するものとなってしまったのである。

ドイツ・ファシズムの人種理論は、ブルジョアに対して、自然科学的な根拠に支えられた良心の安静と、従って、考え得る最高度の安全とを約束するものである。この理論は、人間の罪の意識をもはやより高次の世界から発せられる声とは認めず、それが様々な人種からなる身体的混合の帰結たる現象にすぎないことを暴き立て、そのことによって、キリスト教がもたらす宗教的な不安感を根底から除去してしまった。原罪というキリ

スト教的観念は、それゆえに、単にユダヤ人が自らについて抱くところの自分達自身が混合人種であるという意識へと還元される。そして人種学教授ギェンター^②は、罪の意識が人間のうちに生じ、もはや安静が訪れることがないという事実においてのみ神が体験されるとする『福音書』の記述は、「真正ユダヤ的なもの^③」だという。ギェンターがこのように言ったからといって、彼がユダヤ人の誇大妄想に追従をいおうとしているなどと考えてはならない。彼はただ、ブルジョアに対して、社会的優越感情を与え、人類の究極的問という危険物を生物学的なものに解消することによって、そのような問を抱懐するという危険に対する安全性を与えようと欲しているにすぎない。良心が血統の問題とされることによって、あらゆる良心の葛藤は悲劇的で逃れえぬものだという契機を失ってしまう、そして一切の宗教上の不一致は、「汝が無垢なる魂となるべきことを常に導きの星とせよ」というような命令によって破い清められてしまうのである。

このように戦慄の念を呼び起すような問題を避けて、この世界の没悲劇的でまやかしの調和へと逃避するという怯懦は、ブルジョアの心理を最も明瞭に示すものである。ブルジョアにとっては、永遠の問題はいかなる棘をもたない。ブルジョア

H. ヘラー「市民とブルジョア」

はいかなる運命も、いかなる解決不能の問題も知らないからである。彼等が知っているのは、ただただ組織問題と、そして最近のものとしては規律問題とだけにすぎない。そしてそれらの問題というのは、既に技術によって解決されていたり、その解決が今後に委ねられているにすぎないようなものである。ブルジョアから究極の平安を奪い去りうるような不安などは存在しない。ブルジョアの休みなき飽食を中断させることができるものは、ただ死と病氣とだけにすぎない。

ブルジョアとは、脱政治化された市民のことである。本来の政治的な観念世界は、常にただ単に私的な存在のあり方と階級的なものにとどまる存在のあり方とを越え出た政治的全体を指示するものである。しかるに、ブルジョアの夜警国家理想論は、単に私的な存在のあり方を妨害するものは全く存在すべきでないということ以上を意味してはいない。所有市民と本採用のサラリーマン (Festsolte) だけがブルジョアたりうるわけであるから、ブルジョアが国家に要求するものは、何よりもまずこの私的な経済的基礎の安全性なのである。勿論、所有市民は教養と所有に基づく民主制の内部において、責任ある政治的機能を行使しないまでも、少なくともそれを獲得しようとする努力を怠らない限りにおいて、所有市民がブルジョア社会の文化

と国家とを指導するものとして代表しようとする意志と勇氣とをもっている限りにおいて、所有市民はブルジョアの偏狭さに陥ることはない。彼らが政治的代表者であることを一切断念し、そのことと結びついてはいるすべての危険から逃れようとし、自らの私的資産と経済的な階級的な位置とを確保するということだけを専ら顧慮するに至った場合にはじめて、それはブルジョアという顔落度(3)に身を落すのである。

ドイツにおいては、所有市民層は、一八四八年以降、完全にといったいいほどにブルジョア化した。それは、政治的指導を皇帝とその官吏とに委ね、自分のためには自らの私的経済活動の安全性と多少の精神的余暇とを求めたにすぎなかった。世界大戦迄は、所有市民は、かかる安全性は市民的法治国家という政治形態によって保護されていると思っていた。そして、アナートル・フランスは、かつてこの国家に対して、それは富める者にも貧しき者にも、パンを盗んだり街角で眠ったりすることを、尊厳に充ちた公平な態度で等しく禁じている、と述べたのであった。一九一八年の革命は、しかしながら、法治国家的立法権力の民主化が拡大された結果、所有市民の経済的安全性が脅かされるまでに至った、ということの意味している。かくして市民は、今や自らの私的資産の安全性をファシスト的独裁に

期待するに至ったのであるが、この独裁は、精神的なもの、人倫的なもの、政治的なものにおける自律と常に結合しているものの一切の危険性に対する敵対者であることを示せば示すだけ、ますます市民から信頼を集めるという始末であった。かくして所有市民的ブルジョアは再び嬉々として脱政治化していった。彼らは嬉々として、一切の種類自己規定を断念して「強者」の下に走ったのであった。しかし、そのような「強者」の強さというものは、しばしばその尻馬に乗る人々の救いようのない弱さに立脚するものである。このように「現状 (status quo)」のブルジョアの安全性を保護する独裁という理想が纏うナポレオン三世以来の擬態のひとつに、ある人物を英雄視して祭り上げるというやり方 (die heroisierende Draperie) がある。当時のフランスのブルジョアは、今日のブルジョアがムッソリーニやヒットラーに対して行っているのと同様に、そのようなやり方を、何よりもまず、手工業者を威圧し、可能であれば脱政治化し、失業者を恐れさせるところの苛烈な警察隊として評価したのである。

英雄視することによって作り上げられる仮面は、しかし、経済的な階級支配のイデオロギーの正当化にとつても、更にある特殊な意義を有している。この仮面は、プロレタリア的市民が

経済的安全性を必然的なものとして追求するということを、英雄的ではないがゆえに価値なきもの、そしてブルジョアのなものとしたいこませるべく作用する。ブルジョアは所有や利子によって生活を保障されたり年金受給権をもつていたりするにもかかわらず、彼らは、プロレタリアが自らの社会主義的保障あるいは社会的保障を、あるいは自分たちの賃金協約を断念しようとしなないのは、プロレタリアとしての英雄的な理想主義の欠如であり、ブルジョアの安全性志向であるという非難を加える。こうしたことは極めて日常的に見聞されるところだが、それはやはり非常に奇妙なことだといわねばならない。英雄的なブルジョアは、ロスチャイルドの宮殿をさえ、疾病保険金庫によって建設された「宮殿」よりはるかに正統な現象とみなすのである。

ブルジョアの人種理論は、ドイツやアメリカのブルジョアに対して、現代の階級支配に対する甚だしく強力な保障を与えた。その理論は、支配階級は自然によって支配するべく召命された高き価値をもつ人種であるという確信に自然科学的根拠を与えて、市民の地位を守ろうとした。指導者選択にまつわる一切の困難性、「リーダーシップを不断に」確認することに基づく支配というものがもつ一切の不安定性と危険とは、そのことによつ

H. ヘラー「市民とブルジョア」

て一挙に除去された。貴族年鑑は、功績という争いの余地ある尺度を掲載規準にするのをもはややめてしまい、その代わりにいまや世界史がかつて知らなかったほどに高度な科学上の確実性をもって編纂可能となっている。つまり、もはや頭蓋の中心という常に明確な決着のつけようのない尺度ではなく、ただ厳密に計量可能な頭蓋の比率だけが問題とされるようになったのである。

英雄化的な隠蔽イデオロギーは、大部分は不当にもニーチェとベルグソン、ソレルとパレットを引きあいに出して唱えられているが、このイデオロギーは少なからず市民とブルジョアの概念の混同に対しても寄与した。このようにして生ぜしめられた混同を取り除くには、市民とブルジョアのそれぞれに対応する対概念を明確にするということが不可欠である。

我々が市民と呼んだのは、社会的—政治的に秩序を与えていく人間のことであった。かかる市民に対して我々がどれだけの尊敬の念を払うかは、かかる秩序を与える行為の動機に依じて様々だといわねばならない。市民は、あらゆる人間の共同生活があまりにも人間的なものであるという理由から、人倫と法とが社会的・歴史的相対性のうちにあることを看破しながらも、なおかつそれに従おうとする。我々はこのような市民に対して

尊敬を拒んではならない。

市民の対立物は、慣習に屈しない偉大なる個人ではなく、意識的、無意識的に社会に闘いを挑んでくる者たちである。偉大なる個人というものは、多くの文筆家たちが考えているのとは異なり、およそ自分に課せられているいかなる掟(Gebot)をも承認しないという点で市民と区別されるわけではない。区別はむしろ、偉大なる個人がもっている創造的な意志の強さにある。偉大な個人は、他者に対してだけでなくとりわけ自分自身に対して、強い創造的な意志を抱くことを掟として強要するのである。偉大なる個人は、確かに、大多数の人々とは異なった良心をもっている。しかし、異なるとはいえ彼はやはり良心をもっているものであり、それどころか、その良心は、自らの定めた掟に対する他者や自分自身の違反に対して、平均的市民の良心よりもはるかに鋭敏に反応するのである。聖者もまた人間社会の中に順応してしまふことなく生きることができ、大衆の馬鹿げた審判から身を引くことができる。オリゲネスは、「我々ととり国家ほど疎遠なるはなし」といつているが、彼とリベラルな文筆家の無頼とは天地ほどの開きがある。リベラルな文筆家たちにとって国家が共感の対象とならないのは、国家秩序がそもそも秩序であって、彼の気儘な行いを制限するからである。

だが、オリゲネスが国家秩序や社会秩序を非難するのは、自らの宗教の無限に厳格な立法に服するためである。

精神や芸術の王国における創造的革命家も同様に旧来の法律を破るが、それはただ、革命家が自ら最大の厳しさをもって尊重しようとする新たな規範のための余地を必要とするからである。「新しい価値を築くための権利を獲得すること——これは辛抱づよい、畏敬を旨とする精神にとっては、思いもよらぬ恐ろしい行為である」。無頼にとっては、規範の破壊が目的であるが、創造的人間にとってはそれは手段にすぎない。このことは、精神の創造的革命家についても政治の創造的革命家についてもあてはまる。このような人物の責任感^⑤は、市民のそれよりも弱くないというにとどまらず、むしろ著しく強いのである。

フランスのロマン主義者が創造した市民^{ブルジョア}の文学上の対立物は、偉大なる犯罪者というキャラクターであった。バルザックの描くジュールジュ・ヴォートラン^{モリス}はその中でも最も印象深い人物であろう。かかる人物の歴史上の先例はルネッサンス期の無道徳的な権力人(Machtmenschen)である。我々がかかる人物に対して感嘆の念を捧げるとすれば、その感嘆の念は、市民^{ブルジョア}の生活形態の偏狭さと凡庸さ^⑥に対するロマン主義的嫌悪感から生じるのであり、デモーニッシュな力の展開と冒険の精神に対

する美的な歎びから生じるのである。バルザックは一八四四年に次のように書いている。「自然のままの生活形態というものは、もはや盗人、娼婦、囚人のもとにしか残っていない。社会から切り離された存在者を除けばもはやどこにもエネルギーは存在しない」。市民社会^{ブルジョア}は、神が不在となり、最近ではすっかり太平楽なものになってしまったが、かような社会においてはロマン主義が今日までもち出してきた犯罪者像の大部分は、詩人の空想に過ぎず、現実の犯罪者の世界とはほとんど関わりをもたない。ともかくもこのことは忘れられてはならない。デープリンのリアリズムがフランツ・ビーバーコプやその他の『アレキサンダー広場』の登場人物のうちに映し出しているのは、英雄としての特徴ではなく、むしろ一層ブルジョアのな^⑥あり方への憧れなのである。詩人は、常に卑しい利己心から自由なものと描かれる偉大な犯罪者を、安全性という市民^{ブルジョア}的な理想の否定を体現するものとして必要とするのである。市民社会^{ブルジョア}の圧倒的な力との緊張に満ちた格闘の中で、偉大な犯罪者は自らは確実に没落していくにもかかわらず、自らの揚棄、自らの魂の大きさと行動の自由を保持し、それゆえに悲劇的英雄の全ての特徴を体現しているのである。ジュールジュ・ヴォートランは偉大な革命家のかかる天才道徳の外にもなおいくばくかの偉大な革命

家としての創造力を有しており、それによって彼は全く自己を見失ってリュシアン・ド・リュバンプレの運命を形作ることもなつたのである。

偉大な犯罪者、創造的な革命家、聖者、彼らは皆^{ビュルガー}市民の克服者である。というのは、これらの者達は実際にあらゆる市民的安全性を軽蔑しているからである。だがこれらの概念をブルジョアという概念の対立概念として位置づけてみると、それは全く異なつた様相を呈してくることになる。ブルジョアという概念に対応するものは、偉大なる法律の軽蔑者、デモーニッシュな権力の使徒といった美的理想像ではなく、無力の故に法を犯す平凡な犯罪者なのである。盗人、娼婦、囚人は、現実には自ら自身の人格のために自由な意志から^{ビュルガー}市民的な安全性を断念したなどといえる輩ではない。安逸な生計を手にするという目的のために人倫と法との違背を余儀なくされたという事情を別にすれば、彼等自身も普通の人達と同じように民法(Bürgerliche Gesetze)を尊重することに大きな価値を認めているのである。娼婦は正式の婚姻(die bürgerliche Ehe)に対して大いなる尊敬を払っており、殺人者や盗人も^{ビュルガー}市民社会のゲームのルールや殺人とか窃盗を禁じた法律を原則的に否定しようなどとは、思つてもいない。彼等は、むしろ、自分自身に危険

が迫ってくれば、その瞬間に直ちに法を要求するであろう。現実の犯罪者は、たとえ数十件の強盗殺人を犯していたにせよ、普通、社会の鼻先に挙骨を突きつけるようなデモーニッシュな意志の持ち主ではない。それはむしろ、心身とも退廃した者、道に外れたブルジョアであつて、自ら^{ビュルガー}市民的な身持のよさを求めていながら、ただ意志が弱いためにそれに耐えることができなかつただけのことなのである。

拘模のごとき輩が偉大なる法律軽蔑者になる素質をほとんどもちあわせていないのと同様に、^{ビュルガー}市民も、単にブルジョアにすぎないのであれば、創造的な革命家に適う素質をもつことはほとんどない。政治的なるものの領域においては、今日では、反革命もまた革命的な風を装うことが流行であるから、革命のパトスは左翼においても右翼においても、なかなかの高値で通る。しかし、革命について語る事ができるのは、新たな生の原理が固有のエートスと自律的な政治的形態を伴つて出現する場合だけである。暴力は革命の技術的手段であるにすぎない。暴力は、普通、革命を勃発させるために用いられるが、なければならないですむものであり、いずれにせよ革命にとつての本質的メルクマールをなすものではない。ところで、ファシズムの反革命の担い手達は、自らの自立的な^{ビュルガー}市民・エートス、理性的自然

法の諸理念を、「ブルジョア」的合理主義、アトミズム、個人主義として否定せざるをえない。それらの代替物として彼等が振り回すものは、反市民的で専ら美学的な見地にのみ立つ権力倫理であつて、それは革命の合理的な手段を自らの非合理的な目的に高めるのである。それゆえにその疑似革命は、親ファシスト的著作家達の適切な性格づけに従うならば、「活動のための活動、つまり政治の領域における『芸術のための芸術』とでもいうべきもの」なのである。

古典的市民の抱く安全性という理念は、人類のより高次なる人倫的使命に対する市民の信仰から生じたものであつた。かような信仰を通じて市民は、まだまだみすぼらしいものであつた存在のあり方から脱却し、自らの生活習慣(Konvention)に対して意味深い文化内容を与えうる理念に引き寄せられていったのである。しかるに、ロマン主義的なブルジョアはこのような信仰をマルクス主義的なプロレタリアートに譲り渡してしまつただけでなく、今日ではそれをブルジョア・イデオロギーとして誹謗しさえする始末である。ブルジョアはいまや新たな生の原理やエートスを欲することはない。彼らはただ永遠に繰り返す「エリート」の循環^⑥の中で自己自身の地歩を占めているにすぎない。いまやあらゆるプチブルは、首尾一貫した帰結とし

ては、自ら自身のチエーザレ・ボルジアとならざるをえないであらう。反市民的ではあつても、決して反ブルジョアではないこのファシズムの教育理想をムッソリーニは、一九二八年二月六日に、青年ファシスト達の前で次のように表明したのである。「口には短剣を、手には爆弾を、そして心には危険を見下す至高の強さを」と。ジェンティレの能動主義的哲学を楯に取るこの暴力の道徳と犯罪者倫理との密接な関係を示すものとして、ファシスト労働組合の機関新聞 *Lavoro d'Italia* 一九二七年一月三日号以上のものを挙げることはできない。「もしポートルンが二〇世紀の哲学に精通していたならば、パリが最高潮に達した時、彼が自らの新たな弟子のウージース・ド・ラスチニャックに対して行なつた素晴らしい演説において、彼は必らずや『能動』の理論に賛意を表明したに違いない^⑦、そこでは皮肉な調子でこういわれているのである。

このような無道徳的な英雄道徳は、ファシストが考えているのとは違つて、市民的な生活形態を破壊するだけではなく、市民的な礼節をも解体する。全人民をコンドティエリを範として教育しようとしたり、或いはそのようなエリートのみを教育しようとするなどということは、狂気の理念である。このような企ては、根本においては、専ら美学的見地にのみ立つところ

の文筆家連の無責任な無頼以外の何物でもない。そのような無頼は、従来まではリベラルであるとか社会主義的であるとかいわれてきたのだが、レッテルはどのようなものであれ、実際にはアナキーなものにすぎない。内外のあらゆるファシスト達による盲目的な模倣の対象となつてゐるファシズムのプロモーター〔たるムツソリーニ〕が、最も緊密な協力者である幹部とともに、アナルコ・サンディカリズムの文筆家の系譜をひいてゐるといふ事實は、忘れられてはならない。ジャーナリストとしてのムツソリーニは、かつて若かりし頃『暴力の哲学』を公刊したが、そこにおいて彼は、ニーチェにならつて思うさまキリスト教の奴隷道徳を呪詛してゐた。^⑧このアナルコ・サンディカリストたる新聞記者にとつては、まさしくこの種の「ブルジョア」との闘いこそが眞の社会主義なのであつた。一九二五年五月一六日にも、ムツソリーニは議会の演説において誇らしげに、自分がかつて社会主義者として、労働者大衆に悲劇的なるものの感情を呼び覚ますに必要な暴動のために尽力したものだと言つてゐる。^⑨この言葉を聞けば誰でもが、リベラリズムと共産主義の間をあるいはまたファシズムとボルシェヴィズムの間をさまよつてゐるわが文筆家連を思い出すことであらう。彼等は、支配する者がスターリンかヒットラーか、それともビスカトー

¹⁰ルかもまだ決定的とならない時に、すべてかような『芸術のため』の芸術』としての暴力の悲劇といったものに血道をあげていたのであつた。イタリアにおいては、アナルコ・リベラリズムからナツィオナール・ファシズムに至るまでがこのように連続してゐるのを、ドイツにおけるよりもはるかに明瞭に見てとることができる。ドイツ・ファシズムの文筆家連には、他の多くの者とならんで、ダヌンチオやマリネッティ¹¹のような人物を欠いてゐる。しかし、かかる文筆家連にはニュアンスにおいて共通するものがある。それは、ブルジョアと闘うと称しながら、実際には¹²市民にとどめの一撃を加えてゐる点である。

既にロマン主義この方、文筆家は自分は市民を——フロイトの失言の結果として常にブルジョアと混同されるに至つた市民を——凌駕してゐると信じこんでゐる。自分は自らの人格のために¹³市民的な諸規範を軽蔑してゐるからだと言うのである。ところが、ここで我々が問題にしているジャーナリスト文筆家が芸術家に対して有してゐる関係は、コソ泥がジョルジュ・ヴォートルランに対するのと同じ関係にすぎない。偉大なる個人が古い価値の表を破り去るのは、あらたな価値の表が置かれるべき余地をあくまでためである。彼らはつねに抗し難いデモ・ニッシュン力におされて法を破壊するのである。これ

とは反対に、無責任な文筆家はアナキストであつて、法破壊も自堕落と虚栄心とに由来するものにすぎない。芸術家というものはいかなる事情の下でも市民的ビュルガーなのらくら者でなければならぬ、などというのはこの種の文筆家心理学がこととする子供じみた思いつきにすぎない。このような思いつきから、枢密顧問官のゲーテもまた市民ビュルガーとみなされたのだが、そのためには、彼が日々の要求を満たすのに熱心であつたという理由の他に、近年では、十分に英雄的に、国民的に思考してはいなかつたという理由が新たに加えられるという始末である。彼等には、プロイセンの参事アイヒェンドルフは、永遠に理解できない人物であり続けることであろう。というのは、アイヒェンドルフの書いた小説『のらくら者』の中には次のような詩句が書かれているからである。¹³

「とどまることをわれはこのまず

風ははるかにわれを駆り立つ

河の流れにのりてしゆかん

陽に目の眩む至福の中で：

問わずすすまんどこまでも

いずこで旅が果てんとも」

大戦前の文筆家連にとっては、反ブルジョアの天才であることの最も紛れなき徴表は、市民的ビュルガーな関係の秩序の中に組み込まれることを拒否する乱行であつた。房飾りのついたピロードの上着であるとか、借金であるとかいったものである。大戦後は市民ビュルガーに対する自らの天才の優越性を証明するのに絵や詩の剽窃が用いられた。市民的ビュルガーな生活形態を守るには、市民には無縁の無限性に関わる冒険を唯一こととする領域、即ち精神的な領域においては、そのような無限性の感覚を体験しながら、それにもかかわらずそれ以外の社会的な摩擦についてはそれに十分に対処していかなければならない。しかし、このような可能性は、この文筆家にはありえないこととされるのである。

今日の新聞や雑誌の編集室にはかような文筆家連がうようよしている。市民的ビュルガーな生活と調和するにはこれら生半可な連中は義務感情も慎しみも欠いているし、またあらゆる社会的諸関係の必然性についての洞察をもっているわけでもない。精神的な偉大さのための力、勤勉さもたず、天才としての責任を果たすわけでもない。彼等についてカール・クラウスは、「個性がないからこそ、才能があるのだ」と¹⁴いっている。こういつた文筆家連は市民ビュルガーに対して、大抵は歪曲された文学的教養をしかもたない市民ビュルガーの妻を通じて、本来市民ビュルガーとは、価値なきブルジョアの

ことだということ数を数十年にもわたって説得しようと試み続け、それなりの成果をあげているのである。

かくしてリベラルな文筆家は、自由の名の下に^{ビュルガー}市民層がアナキー化していくことの下ごしらえをした。ファシスト文筆家はこの線押し進めて、そのアナキー化を英雄的な暴力倫理の名において完成させた。リベラルな文筆家は^{ビュルガー}市民の生活への調和と順応のすべての中に忌むべきブルジョアの安全性要求を嗅ぎつけた。精神的、人倫のおよび政治的な無節操や自墮落のすべてをかかえる文筆家は神聖なる人権として擁護する。こういった輩にはニーチェの言葉があてはまる。「自分の服従を投げ捨てた時に、自分の究極の価値をも投げ捨ててしまった者が少なくない」。ファシストの文筆家はこのような無頼—人道主義を、ブルジョアの畜群大衆をこれらの畜群をのみ拘束する^{ビュルガー}市民的規範に超然たりえていと自惚れている強者の英雄的な権利にまで高めた。^{ビュルガー}市民的国家秩序や社会秩序の信頼を汚すことに、リベラルな文筆家もファシストの文筆家も等しく手を貸しているのである。

最後に、ブルジョアとプロレタリアという政治的概念の対置に更に触れておくことが必要であろう。コミニズムやアナール・サンディイカリズムに属するロマン主義的文筆家層といった

ものも存在するが、それはプロレタリアを、あらゆる^{ビュルガー}市民的安全性を超然と軽蔑し生涯にわたって永久的な創造的革命以外の何ものにも従事しようとしないう英雄へと高めようとする。このように革命に永続的に従うということを拒むプロレタリアは、コミニズムのアジテーションによってもファシズムのアジテーションによっても、^{ビュルガー}市民に墮落したとの厳しい非難に曝されることになる。この場合、戦線は誤ってひかれていたのである。このようなロマン主義者達には一度次のことをハッキリと行ってやらねばならない。それは、社会主義的プロレタリアは^{ビュルガー}市民的安全性を決して軽蔑したりしないだけでなく、自身自身のためにそれを追求するし、またしなければならぬということである。生産の無政府性に反対し、計画的な共同経済を求めて闘う社会主義は、被雇用者を私的資本主義の利潤経済の恣意の偶然性から保護すること以外に何を求めるといっているのであるか。^{ビュルガー}市民という言葉によって社会的慣習に組み入れられている人々のことを理解するならば、社会主義的慣習は、所有^{ビュルガー}市民の社会秩序が必要とする以上に^{ビュルガー}市民徳を必要とするのだということに、疑いの余地はない。無論、幻想を捨て去った暴力唯美主義者たるソレルとともに、重要なのはただ暴力的行為だけであるとの考えをもつのであれば、そればかりか社会主義者の運

料 動には「ストライキという英雄詩」の他に何も残らないことを確信するのであれば、社会主義の「ブルジョア」的目標に対する責任は拒絶され、労働者層に悲劇的な英雄化をほどこすことだけが義務と感ぜられることになる。しかし、その場合には、ソレル主義者とファシスト・ムッソリーニの間の違いはもはやほとんど認められないものとなる。

ソレルの批判は、戦闘的社会主義がすぐにもブルジョアの安逸のぬかるみにはまりこみかねないものだという懸念に支えられたものであって、それが一定の正しさを有していたことは決して見逃がされてはならない。そしておそらくファシズムは、実際に、労働運動に暴力的な階級闘争の方法を強要することによって、労働運動がブルジョアの安全性に耽るという伝染病から治癒させることを歴史的課題としているのかも知れない。しかし、労働者層がブルジョア化するということの危険性などは、暴力を賛美する文筆家によって血みどろの闘争へと駆り立てられた労働者階級が何よりも第一にファシズムを自覚させ、暴力的行動を続けていくうちに、結局はヨーロッパ文化の瓦礫の下に自らを埋葬してしまうことになるという危険性と較べれば、ささいなものだ、とわたしには思われる。それにしても、戦後のプロレタリアの経済状態はなほた劣悪なものであって、そ

れはプロレタリアの闘争意志をマヒさせないでいき、プロレタリアをブルジョアの飽食から遠ざけておくには、全く十分なのであろう。

社会主義的労働運動が市民的文化的形態を受容することによってブルジョア化するという危険性もほとんど存在しない。産業労働者層は所有市民の生活形態とは内容的に異なる生活形態を作りあげるであらう。彼等が全く異なった存在条件をもっているということがそのために有利な方向に作用する筈である。成程、文化破壊的な革命的ロマン主義が、市民的世界のすべてをブルジョアのなものと放逐してしまうことによつて、あらゆる文化的連続性が断ち切られるという危険性は存在する。民主的デモクラシー(Democratic)新聞の文芸欄においても、コミュニストやファシストの論説においても、ひとしくしばしば目にするのでできるかか革命的文筆家連を文化的ボルシェヴィストと呼ぶなら、それはある点でロシア・ボルシェヴィズムに対して失当とならう。なぜなら、コミュニズムは、ロシア人にとつては、次に書くエッセーにおいては立場を取り換えることができるというような空疎な態度なのではない。彼等は自らの確信のために闘い、身命をなげうっているからである。

H. ヘラー「市民とブルジョア」

更にその上、ブルジョア・キラーとはやし立てられる今日の文筆上の英雄達が、ボルシェヴィズムの教育人民委員ルナチャルスキーと同程度に我々の文化の将来に対して責任を燃え立たせ、市民的なものとブルジョア的なものとの間を明確に区分しようとしていたのであれば、どれほど喜ばしいことであつたであらうか。ルナチャルスキーは、既に第一革命の時期に文学のタイプを次のように特徴づけていた。『古い』学問や『古い』芸術を普及させることはすべて、市民的な趣味との妥協、いままわしい提灯もちの行為、古い腐敗したものの血を入れて若々しい社会主義的有機体を殺してしまうこと、といったことを意味すると信じている多くの人がいる。幸いにも、かような誤った見解の主張者はそう多くはない。しかし、このような見解が引き起こす被害は甚大なものとなりかねない。然り、私は何度でも繰り返して言うが、プロレタリアはむしろ普遍的な人間的教養をすべて身につけなければならぬ。プロレタリアは一つの歴史的階級である。歴史的な階級は過去の全体との関連を保ちつつその道を前進していかねばならない。学問や芸術を市民的なものであるとの理由で拒絶することは、織機や鉄道を同じくこの理由で否定するものと同様にナンセンスである。ラディカルな革命によってヨーロッパ文化の集団主義的段階が到来す

ると考える者といえども、その段階のうちにすべての市民的生活形態の否定だけを見てはならない。ただそのヘーゲル的意味における止揚、即ちその廃棄であると同時にその保存と高次の発展をこそ見なければならぬ。

我々を取り巻くブルジョアそして我々の内なるブルジョアに対する闘いは、永久に必要である。現代は所有ブルジョアをその安全性の中でのみから根本的に目覚めさせた。最も古く最も尊重されねばならない絶対確實なものと考えられていた所有市民の生活の砦が破壊されてしまったからである。このことが唯一の理由でもないし、第一の理由でもないことは無論であるが。ブルジョア自身が徐々に、自分の魂や精神はもはや満たされてはいない、と感ずるに至っている。ブルジョアは自らの神々を信じていることができなくなっている。市民の全社会秩序が、それを支えている経済、学問、そして技術をも含めて、ブルジョアにとって疑わしいものとなり始めたのである。至るところで深淵が口を開いている。そのようなことがおこるなどとは、ブルジョアには従来は決して信ぜられないことであつた。それゆえに「強者」の力を借りて自らの昔日の安全性を取り戻せしめるのではないかというような希望も、時を経ずして生じてきた。しかしながら、現在、我々を揺るがしている衝撃は、

称したものの。シンクレー・ルイス(Lewis, Sinclair, 1885-1951)の同名の小説『バビット』(一九二二)に由来する。ルイスの小説は中産階級をリアリティックに風刺する点に特徴があると言われる。『バビット』でも、困窮的な社会や醒めた家庭生活からの脱却を図るものの、結局は以前の退屈な生活へと戻って行く中年実業家の姿が描かれている。

(2) ギュンター (Günter, Hans Friedrich Karl, 1891-1968) はヘルリン大学等教授。彼の著作はナチス人種主義のイデオロギーの基礎となった。他に *Rasseskunde des jüdischen Volkes* (1933) などがある。

(3) アナトール・フランス (France, Anatole, 1844-1924) の言葉はよく引用されるが、彼の小説『赤い百合』中の放浪詩人シュレーツトが革命以来のフランスを批判している言葉である。「^{レイトワイト}國民であるということ」は、貧乏人にとつては金持ちの権力と閑をいつまでも支へてやることなのです。かれらは厳かな法の平等の手前、さういふことのために勤まなければならぬのです。厳かな法の平等とは、貧富の別なく一様に橋の下で寝たり、町中で物乞ひをしたり、パンを盗んだりすることを禁じてゐるのです。」(アナトール・フランス長篇小説全集第十二巻、小林正訳 白水社、一二七頁)

(4) オリゲネスの言葉としてヘラーが引用している *Nec ulia nobis magis res aliena quam publica* 『国家学』(Staatslehre)』でも引かれてゐる (S. 71. 邦訳 一八頁)。また『社

会主義的対外政策 (Sozialistische Aussenpolitik? in: Gesamtnetle Schriften Bd. I, S. 415-420.)』S. 418. で同じ言葉がテルトゥリアヌスからの引用として用いられている。

この点の異同を、全集の編者ニーマイヤーは指摘しながらも何れからの引用であるかは原典から確かめることができなかった旨、断っている (G. S. III, S. 419. 邦訳四九二頁参照)。この言葉はテルトゥリアヌス『護教論』(Tertullianus, 155?-?, Apologeticus) 第三八節の三に見られる。「しかるに、われわれキリスト教徒は、そのような名譽欲や権勢への野心は全くもたないものであるから、そんなコネを作る必要は毛頭なく、政治などというものは、全くわれわれとは関係ないのである。われわれはたった一つの國家(civitas)しか知らない。それは『世界』である。」(傍点部分(筆者)がヘラーの引用にかかる部分である。なお訳は『キリスト教教父著作集』一四一テルトゥリアヌス2・護教論(アポロゲティクス) 鈴木一訳・教文館

八九頁による。オリゲネスについても同様の言葉がある可能性はあるが、今のところ確認できていない。なお、鈴木訳で『政治』となっている *res publica* は改めて言うまでもなく、「國家」という訳語も該当する。「護教論」の文脈では、世俗的な権勢欲を意味する「政治」が妥当するように思えるが、ヘラーによる引用の文脈では「國家」ないし「國事」の方が意味上の流れがよいために、「國家」としておく。「國家学」(安訳)でも「國家」とされている。無論、両者で大きな意味上の齟齬が生ずる

という訳ではない。

(5) ジョルジュ・ヴォートランはバルザック (Balzac, Honoré de, 1799-1850) のいわゆる「人間喜劇」のうち、『ゴリオ爺さん』『幻滅』『浮かれ女盛衰記』という三つの小説の登場人物である。後出のリュシアン・ド・リュバンブレは『幻滅』『浮かれ女盛衰記』に、また、ウージーヌ・ド・ラストティニヤックは『ゴリオ爺さん』などに出てくるが、Laboro d'Italiaで引かれているというのは『ゴリオ爺さん』であろう。何れも邦訳全集(東京創元社)に収められている。この人物の性格につき、邦訳全集中の解説(第八巻・安土正夫)から引用しておく。「彼の悪は知的な原理主義にある。ルソーの弟子をもって任ずる彼は、社会をフィクションとして軽蔑する。財産というものについてブルドン流の主張をしながら、いっさいの社会的制度を悪とする彼は社会主義者ではなく、徹底的なアナキストである。彼は過失による犯罪者ではなく原理による犯罪者である。社会を征服しない限り彼は犯罪者たらざるを得ないが、征服された社会は彼に対して犯罪者となるであろう。ここまででは革命家と同じだが、彼は人間の進歩、より善き社会の可能性を信じないし、同志的な結束も持たない。彼は唯一人、アナキックな原理を抱いて社会に挑戦するのみである。』ヴォートランは社会生活に参加するべく、青年と「教育的」交流をするが、その青年と言いうのがリュシアンであり、ウージーヌなのである。ヴォートランの哲学は、『幻滅』中の「マキャ

ヴェリの弟子が説く野心家のための歴史哲学講義」以下にまとまって示されている。

(6) アルフレート・デーブリン (Döblin, Alfred, 1878-1957) は『ベルリン・アレキサンダー広場』(一九二九)で知られる小説家。当時の位置付けを知る一つの手掛りとして、クルティウス (Curtius, Ernst Robert, 1886-1956) の次の言葉を引用しておく。「教養解体の現象は、アルフレート・デーブリンのような今日もてはやされる小説家が、自分はバルザックを一冊も読んだことがないと言明し、さらに言葉をつづけて、『バルザックを読まないことは、私にとって、どこか名所旧跡を見物しないのと同様に自明のことに属する』と公言するところに見られる。『危機に立つドイツ精神』(一九三二、南大路振一訳、みすず書房)一六頁。ヘラーも文化的な次元では、このクルティウスの言葉に見られるような「教養解体」、つまり人類普遍の文化の解体に対する危機感を抱いていたといつて良からう。

(7) チェーザレ・ボルジア (Borgia, Cesare, 1475-1570) は「法王アレッサンドロ六世(ロドリゴ)の長男であり、歴史上「毒を盛る男」などと呼ばれ、謀略者・暗殺者の代名詞とされて来た。当時フィレンツェ大使であったマキャヴェリとの交流でも知られる。ヘラーも、ヴォートランの「歴史上の先例」である「ルネッサンス期の無道德的な権利者」の典型例として、彼を念頭に置いている。伝記として、塩野七生「チェーザレ・ボ

ルジアあるいは優雅なる冷酷』(中央公論社)。

(8) ジェンティレ (Gentile, Giovanni, 1875-1944) はファシズムの代表的理論家で、一九二二―二五年に文部大臣も務めた。彼の能動主義哲学とは、思惟ないし主観と自然ないし客観とを対立的に捉える超越的方法に対して、後者を前者に還元するものである。つまり、精神は思惟活動そのもの、生成であり、この精神の实在を現実と捉える。そして自然は固定された思惟であり、自我の所産である限りで現実的なものと考える。

(9) コンドティエリ (Condottieri) とは、一四世紀イタリアの傭兵隊長を意味する。イタリヤ・ルネッサンス期には、豪族・野武士が傭兵隊長となり、支配者へと上昇して行く例が見られた。ミラノのスフォルツァ家などをその典型例として挙げる事ができる。「スフォルツァ(強襲する人・何事をも成し遂げる者)」というあだ名に見られるように、はなはなしい戦勝と背任行為により卑賤の身から国権を握ったルネッサンス君主の典型である。上述のチェーザレ・ボルジアは傭兵隊長出身ではないが、性格的には類似するといえよう。因みにスフォルツァ家を没落に導いたのは、チェーザレ・ボルジアである。

(10) ビスカートル (Piscator, Erwin, 1893-1966 演出家) を指すと思われる。ビスカートルは、二〇年代ベルリンで「左翼劇場」を主宰し、労働者階級の観客向けに煽動的な劇を演出した。「レヴュー・ローター・ルンメル」での選挙のプロバガンダにはじまり(二四年)、その演出の政治色の強さから、国立劇場、

フォルグスビューネと対立する(二七年)。その後も自らの「政治演劇」を通じて劇場闘争を行なった。

(11) ダマンチオ (D'Annunzio, Gabriele, 1863-1938) はイタリアの詩人、小説家。官能主義と唯美主義の追求者として知られ、第一次大戦では熱狂的な参戦論を唱えて従軍、戦後は義勇軍を率いてユーゴのファウメ市を占領するなど軍事行為を賛美し、ファシズム運動に影響を与えた。邦訳に、「聖セバスチヤンの殉教」(三島由紀夫、池田弘太郎訳、国書刊行会)がある。マリネッティ (Marinetti, Filippo Tommaso, 1876-1944) もイタリアの詩人、小説家。いわゆる「未来派」の総帥として知られる。第一次大戦直後からムッソリーニとともにファシズム運動をおこした。「危険への愛、活力と無謀との性癖」「速度の美」「暴力的強襲」などをモットーとし、「世界の唯一の衛生法である戦争、軍国主義、無政府主義者の攻撃的な身振り、殺すという美しい観念、女性蔑視」をほめたたえた。そして「未来派政治綱領」を発表するなどして「絶対的独立国イタリア」「汎イタリア主義」を唱えた。これらが「青春」のイデオロギー化を一つの要素としたムッソリーニのファシズム運動を支持するものであったことは言うまでもなく、事実ムッソリーニとともに襲撃に参加したこともあった。またマリネッティはダマンチオに対して連帯の言葉を表明し、またダマンチオもこれに返礼を送っているという。マリネッティについては、「ユリイカ」一九八五年一月号「未来派」特集所収の論稿及び翻

訳を参照。

- (12) 「フロイトの失言」のフロイトとは、精神分析で著名なフロイト (Freud, Sigmund, 1856-1939) を指していると思われるが、具体的に「失言」とは何を考えているのかは、ここだけでは必ずしも明らかではない。もっとも、フロイトは精神分析を介して「市民文化」や「市民道徳」に対する批判——彼がこのような文化にコミットしていなかったかどうかは別として——を展開したことは周知の通りであり、その限りでは理解できる。但し、ブルジョアと市民との混同という論点や、それを流通させるにあたってフロイトの果たした役割が当時一般にどのように評価されていたのか、また、ヘラーがどう理解していたのかについては、更に検討を要する。

- (13) ヘラーはアイヒェンドルフ (Eichendorf, Josef Freiherr von, 1788-1857) 『のふへら者』からの引用としているが、該当する箇所は見出せなかった。因みに『のふへら者』(Aus dem Leben eins Taugenichts, 1826) のついでには、筑摩世界文学大系二六・ドイツロマン派集に、川村二郎訳がある。

- (14) クラウス (Kraus, Karl, 1874-1936) は、二〇世紀初頭のウィーンでいわば「文化批評家」として当時の社会の精神的・道徳的・文化的退廃を糾弾し、孤立無援の活躍をし、彼の個人誌「ファツケル」に数多くのアフォリズムを発表した。その多くは「カール・クラウス著作集5・アフォリズム」(池内紀編訳、法政大学出版会)に収められている。ヘラーが引用してい

るものの全文を以下に掲げておく。

Seit Heine wird nach dem Leisten: »Ein Talent, doch kein Charakter« geschustert. Aber so fein unterscheide ich nicht: Ein Talent, weil kein Charakter.

(「ハイン以来、判で押したように「才能はある、だが個性がない」これがお決まりの評であった。だが私はこんな微妙な区別はしない。)

個性がないからこそ、才能があるのだ。【拙訳】)

このアフォリズムは、「Sprüche und Widersprüche」に含まれているが、前記の邦訳では割愛されている。この句は Beim Wort Genommen. (Kösel-Verlag, 1955), S. 95. より引用した。ヘラーの引いているのは「最後の二節である。類似の内容のものも以下に挙げておく。「才気は応々にして性格の不備にやせ。(Talent ist oft Charakterdefekt.)」(S. 95. 邦訳一〇三頁)「個性は内在する。才能なくとも。(Die Persönlichkeit hat's in sich, das Talent an sich)」(S. 91. 邦訳一〇四頁)。

- (15) ルナチャルスキー (Лунчацкий, Анароийъ Васильевич, 1875-1933) はソ連の政治家・評論家・文学者。一九一七〜二九年に教育人民委員を務めた(尚、本文では、ヘラーの原語は Unterrichtsminister (教育大臣) となっているが、拙訳では当時のソ連での呼称に従って教育人民委員とした)。なお、引用箇所についてはまだ確認できていない。

H. ヘラー「^{ビュルガ}市民とブルジョア」

本稿は Hermann Heller, Bürger und Bourgeois. (in die Neue Rundschau, 1932, 43 Jg., Bd. 1, S. 721-736. ^{ナヤ}Hermann Heller Gesammelte Schriften 2 Bd. S. 625-642) の全訳である。ヘラーについては改めて紹介の必要もないと思うが、ワイマール期ドイツの国家学者であり、主著『国家学(Staatslehre)』(安世舟訳、未来社) などにつき既に邦訳もある。この論文が興味深いのは、機能主義的と理解されることの多いヘラーの議論が、当時の政治的及び文化的状況の中でどのような自己了解を示していたかが明らかに示されていることによる。勿論全ての問題がこの論文で示されているような市民^{シユルガ}主体の問題に還元される訳ではないが、しかしそれが重要なファクターとして当時の危機状況の中で意識されていた点を見逃してはならない。そして彼の描く市民像^{シユルガ}が、いわば所有的個人主義の墮落した形態であり、当時のドイツ文化圏の中で批判の矢面に立たされていたブルジョア像と区分されねばならないこと、そしてブルジョアや利己的な市民社会を克服するのはファシズムに見られるような(そして直接触れられてはいないが)いわゆる保守革命論者も含まれようが)新たな全体性の構築によるべきではないこと、このような緊張関係の中でヘラーの議論は立てられているのである。ヘラーのこのような議論、現代分析は上述の『国家学』

にも、そしてその方法論そのものの中にも見てとることができるとののだが、主体形成との関係では、当時のラディカルな文化論との対比の上で更に議論を深めていかななくてはならない。ここでは政治と文化との関係で、市民的秩序^{ビュルガリヒ}を支えるものとしての「文化ないしは伝統」と、これとは次元を異にする左右のラディカルな「文化」との緊張が考慮されなくてはならないだろう。ヘラーの解決策の妥当性はともかく、この問題領域そのものは現代においても変わっていないと思われる。ヘラーの本論文を扱った文献としては、斎藤誠「ヘルマン・ヘラーにおけるファシズム論の基本構造」『法学(東北大学)』四五巻一号、栗城壽夫「憲法におけるコンセンサス(一)」『法学雑誌(大阪市立大学)』二八巻一号などがあり、参考にさせて頂いた。

訳文そのものは兩名の共同作業である。蛇足ながら、ドイツ国家学ないし国法学の文脈で通常登場する人物以外でヘラーの論述を理解する上で必要と考えたものについてのみ大野が簡単な訳註を加えたが、まだ未確認の部分が残っている他、理解の不十分な点もあると思われる。訳文も含めて大方のご教示が得られれば幸いである。